

修士論文概要

ネパールにおける障害児施設職員の業務における思いや考え方と行動の考察

Consideration Of Mind And Behavior At Work Of Day Care Facility Staff

For Children With Disability In Nepal

17MD0041 中塚直希

研究目的と研究方法

筆者が JICA 海外協力隊として、ネパールの障害児デイケアで活動していた時、デイケアを利用する子供に対するスタッフの指導について疑問を感じるがあった。スタッフは、指導を理解できない子供に対し大声での指導や顔を叩くなどの行動をしたり、注意がそれてなかなかトイレに行けない子供を強引に誘導するなどの行動があった。また、スタッフが行う全ての介入がマンツーマンで行われていること、全ての子供に同じ方法で教育や介助等の生活支援をしていること、介入の成果を見ていない状況が観察できた。筆者はなぜ子供一人ひとりの身体機能、生活に必要とされる学力やリハビリテーションの個別的介入をしないのか、なぜスタッフはその暴力と捉えられるような行動を取るに至ったのか、なぜ日本のデイケアと比べて異なる行動を取るのかを明らかにしたいと思った。

本研究では、スタッフがデイケア業務を行う時どのような経験や考え、思いに基づいているのかを明らかにし、スタッフ個人が持つデイケア業務の思いや経験の関係性から個人、スタッフ達の行動の傾向を捉え論述する。そこで本研究ではネパールの「デイケア業務に対する思いや考えと業務行動との関係性は何があるのか」を明らかにすることが主目的である。そして、副目的としてネパールのデイケアスタッフが行う業務行動の背景には何があるかを明らかにすることで、主目的を考察できるものとする。

多職種間のケアに対する意識の関係性、ケアの意識の変容の分析を調査している先行研究は存在するが、スタッフの意識と業務行動に対して分析した研究はまだ報告が限られている。また、解釈学的現象学という視点から業務行動と経験を細分化し、理解困難な業務の行動の背景を明らかにする論文も限定的である。さらに、ネパールの文化や医療格差に焦点を当てた論文は存在するが、ネパールのデイケアスタッフを調査対象者としたものはなく、ネパールの文化的背景を取り入れたデイケア業務とその考えについても明らかにされていない。したがって、ネパールのデイケアスタッフの業務行動の背景には何があるかを明らかにし、業務への意識と業務行動との関係性を明らかにすることは意義があると考ええる。

本研究では解釈学的現象学に基づき、障害の個人モデルを分析枠組み、解釈学的現象学的分析 (IPA) を分析方法とし、研究対象者であるデイケアスタッフのデイケア業務への思いや考え方、研修履修経験を分析し、業務行動との関係性を明らかにする。デイケア業務への考え方に関する調査は解釈的現象学的視点から、アンケート、半構造化インタビューを行い、5 人の思いや考えに関する傾向をカテゴリー分けし、傾向の関係性を図式化することを通して分析を行う。これらの過程の中でスタッフ個人の思いや考え方について筆者の主観の解釈も含めた解釈学的現象学的分析を行い、スタッフの思いや考え方の理解を図る。この主目的を明らかにすることにより、デイケアスタッフを育成する位置づけであ

る職員研修への提言、これから活動する JICA 海外協力隊の効果的な活動の助言になると捉え論述を進める。

論文構成

第1章 はじめに

第1節 研究の背景

1.1 ケアの意識に関する先行研究

第2節 問題の所在

第3節 研究目的

第4節 論文の構成

第2章 研究の方法論と分析枠組み

第1節 研究の方法論

1.1 認識論：解釈学

1.2 存在論：現象学

1.3 本研究の方法論：解釈的現象学

第2節 本研究の分析枠組み：障害の個人モデル

第3節 分析の方法：解釈学的現象学的分析(IPA)

第3章 ネパール社会の背景と概要

第1節 ネパール社会の背景

1.1 ネパールの概要

1.2 ネパールの障害者の社会保障サービス

1.3 ネパールの躰

1.4 ネパールの障害者の権利の背景

第2節 ネパール障害者関連政策・社会サービス・教育システムの歴史的展開

2.1 ネパールの障害者支援政策

2.2 ネパールの教育政策

第3節 ネパール障害児施設政策・事業の概要

3.1 調査対象のデイケアの概要

3.2 職員研修の概要

第4章 ネパールのデイケアセンタースタッフの行動と考え、思いの関係性の分析

第1節 ネパールでの調査概要

1.1 調査地概要

1.2 調査対象者

第2節 ネパールデイケアの実態

2.1 調査協力機関の概要

2.2 デイケアの概要

2.3 家族向け支援

第3節 実例に見るネパールのデイケアスタッフの思いや考え方と行動の関連性に関する調査報告

3.1 調査結果

3.2 スタッフ5人のデイケア業務の考えと業務行動の傾向

3.3 デイケア業務の考えの傾向と行動との関係性の考察

第4節 まとめ

第5章 結論と今後の課題

第1節 結論

第2節 今後の課題

参考文献一覧/別添

論文の概要

研究の背景

ネパールはカトマンズを首都とし、国土面積は北海道の約2倍の約14万7千平方km、北部にヒマラヤ山脈がそびえる地形に人口2,649万人(2011年)の人々が生活している。公用語はネパール語だが、約125のエスニック集団で構成され、個々の民族語が混在する多民族社会である。障害者にとっての生計は所得の他に社会保障サービスから受給する手当がある。障害者の把握と障害者政策を担当する女性・子ども・社会福祉省は4種類の障害者手帳交付による障害者手当の充実化の事業を担っている。ネパールの子供への躰の傾向として、子供にあるべき態度や行動を指導する時は静かに指摘するが、態度や行動の改善が見られない時には大声で指導すること、時には顔を叩くなどの行動が見られる。筆者がデイケアで活動していた中でも、きっかけは異なるが子供に大声を出す、部屋を走る子供に対して強引に椅子に座らせるなどの躰を通して、子供達の教育への理解を促す様子を確認している。国連が定める障害者の権利に関する条約(Convention on the Rights of Persons with Disabilities: 以下 CRPD)において暴力と虐待の根絶を公言されているように、これを批准しているネパールでも障害児者の保護だけでなく、社会参加の促進も包括され、障害者支援団体との連携が強調されている。障害者関連政策では1997年の第9次5カ年計画では、地域を含めたリハビリテーションの構想を取り入れた計画が示され、13項目の社会サービスの施行と社会開発事業への民間団体の参加を促している。

研究の対象

本研究対象機関のデイケアは現地 NGO の BhaktapurCBRO が運営している。BhaktapurCBRO は1985年に創設され、筆者が訪れた2019年時点では、デイケア業務の他、職員研修、フィールドワークによる障害児のアセスメント・指導、家族を対象とした研修の中で障害児のケアに関する知識や情報を伝えるなどの取り組み等を行っていた。研究対象者はこのデイケアに勤務する教師スタッフ3名、ヘルパースタッフ2名の計5名のスタッフである。この5名のスタッフは基本的な知識をRCRDが管理する職員研修を履修していることになっている。履修内容には現場活動で必要な科目を準備しており、1ヶ

月の短期間で研修を行っている。CBR Basic Training Course の履修科目は主に 22 種類あり、障害児者支援を学ぶ場の少なかったスタッフにとって基礎的な知識を得る場となっている。

結果

今回の分析結果から、スタッフの業務の考え方・やりがいの共通点としては、デイケアを利用する子供のためにできることをしてあげたい、いい大人になって人生を歩んで欲しいという思いが存在していることが明らかになった。一方で、スタッフは指導や介助困難による葛藤を抱えており、新しい疾患の学習に意識が向いている。デイケア業務の考えには、子供への期待、友人・家族との支え合い、業務の課題、不足した経験・知識・技術を補いたい思い、子供の変化へのやりがいがあり、即ち業務行動の背景には子供の自立や自己実現すべきという考え、幸せな人生を送ってほしい期待が存在していることが分かった。さらに、業務行動には、各スタッフのこれまでの経験や知識・技術も影響し、スタッフはデイケアでの経験や子供の家族への支援経験から、できることを行っている、子供が幸せに感じる事がスタッフの幸せであるというやりがいを感じており、ポジティブな姿勢でデイケア業務を行っている。つまり、調査対象のスタッフは、仕事へのやりがい、子供の将来や希望、スタッフ自身の自尊心が特にデイケア業務の考え方の基になっていることがわかった。

考察

デイケア業務の考え方と業務行動は、教師スタッフとヘルパースタッフとで差異が生じていることが明らかとなった。教師スタッフは、職員研修の履修経験を持ち、デイケア業務の介助の課題に対して、新たな介入方法の習得を目指す。この背景には、研修で学んだ方法で教育指導や介助をするが、指導方法の多様性が少なく、上手くいっていないという葛藤がある。そのため、適切なアプローチを知り、評価を行えるようになるために、新しい情報を求める欲求が生じ、解決策を見出そうとしていると考えられる。一方で、ヘルパースタッフは、職員研修を全て履修しておらず、デイケア業務の課題に対して、これまでの稼業や育児経験、また子供が幸せを感じてほしいという思いから介入方法を検討する傾向がある。例えば、何度指導をしても子供の理解がえられない時に大声で指導をする、顔を叩いて指導するという行動は、その背景に、自身がこれまで経験してきたネパールの古典的躰方法が存在していることが明らかとなった。このことから教師スタッフとヘルパースタッフの間には業務行動と考え方の差異が認められると共に、デイケアスタッフの業務行動の背景には、子供への展望や友人・家族を大切にしたい思いや業務経験・知識・技術が全スタッフに共通して存在していた。そして、子供へ期待する思いや葛藤が特に業務行動に影響を与えていると考えられる。

以上のように、デイケア業務の考え方と業務行動は、教師スタッフとヘルパースタッフとで差異があり、これは障害の捉え方の差異に基づいていることが明らかとなった。教師スタッフは、社会モデルの視点から、デイケア業務の介助の課題に対して、新たな介入方法の習得を目指し、ヘルパースタッフは、個人モデルの視点から、これまでの稼業や育児

経験、子供が幸せを感じてほしい思いから介入方法を検討する傾向が確認できた。スタッフは自身の思いや経験、知識によって実践可能な方法を探求しているといえる。したがってスタッフの業務行動の背景にあるスタッフの異なる障害の捉え方がデイケア業務行動の差異に関係していることが明らかとなった。

本研究の副目的である「スタッフの業務行動の背景には何があるのか」という問いに対して、筆者が知らなかったスタッフの経験と思いが影響するデイケア業務の考えの存在があった。そして主目的である「デイケア業務に対する思いや考えと業務行動との関係性は何があるのか」という問いに対して、訓練や授業を行っても見られない成果や変化に対して葛藤を抱き、研修での学習内容の実践や古典的躰をすることが業務行動に表れる傾向が明らかとなった。各スタッフはできることを行い、子供の幸せ、自立、自己実現を期待する思い、友人や家族の幸せのために支援する姿勢が業務のやりがいとして存在していた。

以上のことから、スタッフ自身の業務に関する経験や技術・知識、障害の捉え方などの考え、思い、やりがいが、子供を幸せにするためにアプローチ方法を模索する業務行動に影響を与えているという結論に至った。この結論がデイケアスタッフの育成を目的とした研修内容の改善、そして今後 JICA 海外協力隊の活動として現地の協力者へ関わる視点の一助となると考える。

今後の課題

今後の課題として、スタッフの自閉症などの新たな疾病教育における知識、心理学的視点における行動の評価や発達評価などの手法を新たに習得することが、今回見えてきた課題解決につながるのではないかと考える。またそのためにもヘルパーの研修参加の機会促進は必要不可欠と考える。さらにデイケア業務からバクタブルの社会に向けた障害を持つ子供たちの情報発信や障害児者支援分野が発展することにより、ネパールで昔から行われてきた障害児への古典的躰などの行動に変革を来たすこと、ネパールの障害者支援政策への提言も可能となるのではないかと考える。